

聞一多の書簡

— 英文篇 —

鈴木義昭

はじめに

聞一多には、生前に書いた書簡、全二三〇通が残されており、それが『聞一多全集』一二・書信・日記・附録（孫党伯・袁鶯正主編 本集は、聞立雕・聞銘・王克私の整理になる。湖北人民出版社 一九九三、十二）に収められる。家族関係のものは、弟の聞家駟や実家の人々、青春時代の多くは、梁実秋・饒孟侃等の人々によって、かなりの数が散逸を免れている。こうした書簡については、拙論「中国の書簡——聞一多の場合——」の中で、家族に宛てたものを中心として取り扱い、同論文の中で、「本稿では触れなかったが、英文で認められたものについては、改めて、眺めてみることにしたい」として英文の手紙について書くことを公約しておいた（日本聞一多学会報「神話と詩」第二号二〇〇三、十二）。手紙は、実を言うと、現存書簡の中で唯一の、英文によって書かれたものである。アメリカ留学当初の聞一多の考えかたを知るのに最適なものであるにもかかわらず、聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』（湖北人民出版社 一九九四）に論評がないばかりか、筆者以外は、他の研究者も今まで余り取り上げることがなかった。

今回、敢えて取り上げた次第である。

一

さて、書簡通し番号二八、「致亲爱的朋友们」（これは、全集編集者による命名であろう）が、（主として）取り上げる英文の書簡である。ちなみに、四巻本旧全集『聞一多全集』朱自清・郭沫若・吳景超・葉聖陶編 民国三十七年八月 開明書店）には、収録されていない。日附に「Aug. 27, 1922」とあることより、一九二二年八月二十七日に書かれたものであることが分かる。当時住んでいた所は「5747 Drexel Ave. Chicago, Ill. U.S.A.」すなわち「アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市ドレクセル：アベニュー五七四七である。

聞一多は、一九二二年七月十六日、上海港から、アメリカ船籍の客船、キーストン号に乗船し、アメリカに向かい、八月一日、ワシントン州のシアトル港に着く。十七日間の船旅であるが、途中、日本の神戸・横浜等に寄港したので、真の意味での海上生活はそれより割り引いて考えるべきであろう。この手紙が書かれた時期前後は、詩作意欲の旺盛な時期であったことは事実で、以下のような作品を残している。渡航前後五か月間の詩作である。

五月：* 「春之末章」（『清華週刊』第二四七期）

* 「初夏——夜底印象」（『清華週刊』第二四九期）

六月：* 「紅荷之魂」（『清華週刊』第二五〇期）

七月：* 「孤雁」（『紅燭』所収）

* 「太平洋舟中見——明星感賦」（『紅燭』所収時、「太平洋舟中見——明星」に改題。「清華週刊」第二七

三期に掲載)

八月；

九月；*「火柴」(「清華週刊」第二六七期)

*「玄思」(「清華週刊」第二六四期)

*「我是一个流囚」(「清華週刊」第二六九期)

*「太平洋舟中見——明星感賦」(前掲)

*「寄懷實秋」(「清華週刊」第二六〇期)

*「晴朝」(「清華週刊」第二六七期)

*「太陽吟」(「清華週刊」第二六〇期)

*「幻中時之邂逅」(「清華週刊」第二二三期)

*「春之首章」(「清週刊」第二四七期)

*「春之末章」(「清華週刊」第二四七期)

*「紅燭」(本月末に定稿)

*「深夜底泪」(「清華週刊・双四節特刊」)

*「美與愛」(「清華週刊」第二二一期 本月末に改稿)

*「遊戲之禍」(本月末に改稿)

*「春寒」(本月末に改稿)

以上、すべてが処女詩集『紅燭』に収められている。

二

この英文書簡の重要性は、当時の聞一多の思想状態、創作状態についても語っており、同様の趣旨が他の手紙にも散見するので、そうしたものの確認という意味でも重要だと考えられるからである。

さて、この手紙の宛名は「Dear friends」とあるだけで、封筒は失なわれたものか、個人名は書かれていない。その前に、呉景超・顧毓琇・翟毅夫・梁實秋及び清華文学研究社の新旧メンバー宛てに、船上から出している（七月二十九日付け 書信二四）。なお、シカゴの連絡先は、「Mr. Charles L. Wu」となっており、暫定のものである。また、シカゴ着後に、呉景超、顧毓琇・梁實秋宛てで書いている。これは文頭に「四友」とあるので、友人四人に対するものである（八月十四日付け 書信二七）。英文書簡は、それより二週間後に書かれるわけである。英文で書く理由を次のように述べている。

Here is my chance to practice typewriting, so I shall write in English, through Language writing Chinese will make me feel much more at home.

（タイプライターを練習する機会に恵まれたので、英語で書いてみようと思う。中国語で書くと、ホームシックに罹ってしまうだろうから）

タイプライターを練習する機会があったことと、中国語で書くと、ホームシックに罹ってしまうからと述べるが、少

なくともその前にも友人宛てには、中国語の書簡を出しているからには、「遁辞」であることが分かる。タイプライターも同様であるが、九月一日の梁實秋・吳景超宛ての手紙（No. 二九）には、

我同钱君买了一架打字机，一架留声机器。

（錢君と一緒にタイプライターとラジオを買った）

と書いている。この手紙は、読み進めていけばわかるが、アメリカ文学界の紹介とその動向について語ったものである。また、胡適と郭沫若についての記事もなかなか興味深い。

本日は、他の手紙も引きながら、以上の点について眺めてみたい。

聞一多は、まず、アメリカ文学史の特徴を——恐らくは、ホイットマン『草の葉』中の詩を引いているであろう——語った後で、アメリカの「新」詩人について、実名を挙げる。

Now the foremost figures of this group of "new" poets are Robert Frost, Vachel, Lindsey, Amy Lowell, Edger . Lee. Masters, Carl Sandburg, Sara Teasdale, Harriet Monroe, and an endless list of others no less prominent .

（「新」詩派の主たるメンバーは、ロバート・フロスト、バーチェル・リンゼー、エミー・ロウエル、エドガー・リー・マスターズ・カール・サンドバーグ、サラ・テイスデール、ハリエット・モンロウといった人たちで、それ以下の人たちは枚挙に暇がない）

と。彼らは、いずれもイマジスト詩人である。聞一多がこの手紙を書いた時点では、エミー・ロウエル、カール・サンドバーグ、ハリエット・モンロウ及びヒルダ・コンクリングの詩に興味をものであろう、後の部分に四人の詩をコピーして寸評を加えているほどである。この名前を列挙した直後に、

You may be interested to know that our literary insurgent, Dr. Hu Shi's (八不主義) is not quite of his own invention either. I shall copy several articles of the Imagists, a school of "new" poet, Miss Amy Lowell is the leader ;

(我々の文学の叛徒、胡適博士の「八不主義」が全部が全部、彼の独創ではないことを知ることは興味深いことであろう) 偉大なる、現存する女流詩人、エミー・ロウエルがリーダーを務める「新」詩派、イマジストのクリードを数条、書き抜いておこう)

として、胡適の「八不主義」が彼の創出したものでないことを指摘する。この点については、以前、書いたことがあるので、詳細はそちらに譲るが、「イマジスト・クリード」は、詩のために書かれたものである(オールディントンによる)が、「八不主義」は、文学全般に対して書かれたものと言うことができる。ただ、中国の「新文学運動」も、詩を中心として展開されたものであるから、似たようなものであった(拙論「聞一多と胡適」八不主義——イマジズムを媒介として——)。また、イマジストの六か条のクリードを二つに分けて記載する。前半は五か条、後半は二か条である。

1. To use the Language of common speech
2. To create new rhythm —— as the expression of new mood
3. To allow absolute freedom in the choice of subject .
5. To produce poetry that is hard and clear, never blurred or indefinite .
 (1. 普通の口語を使うこと 2. 新しい心情の表現として、新しいリズムを作り出すこと 3. 主題の選択と
 いう点では、完全な自由に従うこと 5. 硬質で明確さを持ち、曖昧で不正確さを持たずに詩を作ること)
4. To present an image
6. Finally most of us believe that concentration is the very essence of poetry .
 (4. イメージを提供すること 6. 要するに、我々の大多数は、集中力こそが詩歌の精華であると確信
 する)

また、次のようにも言う。

Our poetry I mean “pai hua shi” —— is too shadowy, too thin, too bony; it needs to be touched up with a deeper and warmer colour that is so characteristic of the Imagist poems, poems modeled with intense concentration. 2> I shall copy Miss Lowell's “Wind and Silver” to illustrate my point; —— (我々の「白話詩」は、余りにも実態がなき過ぎるし、薄っぺら過ぎるし、瘦せこけている。強度の集中力を持って構築されたイマ

ジストの詩の持つ個人的な、深い暖かみのある色彩によって修正を加える必要がある。ロウレル女史の「風と銀」を書き写し、僕の観点を説明したい)

(詩、省略)

Compare these with any of prosaic stuff in our magazine .

(この二作と我々の雑誌の韻文作品とを比べてみたまえ)

と。英文書簡投函からほどなくした9月1日付け梁実秋、呉景超宛ての手紙には、

又已代诗组定《诗》(杂志)一份, 计亦将寄到。

(詩歌研究班のために代わりに雑誌『詩』を頼んでおいたので、近々送るつもりだ。)

と書いているので、清華文学社の後輩たちは、「ポエトリー」を手にすることができたかも知れない。

さらに、約一ヶ月たった、九月二十九日付けの梁実秋、呉景超宛ての手紙には、

杂志内容余意宁欠勿滥, 篇幅不妨少。体裁仿寄上之 Miss Harriet Monroe] s 《Poetry : A Magazine of Verse 》、
吾希望其功用亦与 《Poetry》 同。

(雑誌の内容は、私の考えでは、多すぎるよりは、むしろ控えめにし、文の長さも短くてもかまわない。スタイルは、先日送ったミス・ハリエット・モンロウの『ポエトリー：韻文の雑誌』に倣い、私の希望では『ポエトリー』

と同じ働きを果したい)

と書いている。自分たちのつくる雑誌は、イマジストたちの雑誌、「ポエトリー」に倣ったものにしたいたいと言うわけである。

十月十日付けの梁實秋、吳景超宛ての手紙には、次のように書かれる。

伊 (Mrs. Bush——筆者注) 要介绍给 Miss Harriet Monroe 那位 enthusiast for and critic of poetry(熱狂的な詩歌評論家——筆者) , (伊的杂志——“Poetry” 你们受到没有c.) 还要介绍给 Carl Sandburg (这位诗人前回的信里我讲过)。致 Miss Monroe 的介绍信我已得着了。我想过几天就去拜访伊了。

(ミセス・ブッシュが私を熱狂的な詩歌評論家ハリエット・モンロウに紹介したがっている。(彼女の雑誌「ポエトリー」は、もう手に入ったかい?) それに、カール・サンドバーグ(この詩人については、この前の手紙で話したよね)にも紹介したがっている。ミス・モンロウへの紹介状はすでもらっているんだ。数日したら、彼女のところを訪ねてみようと思っている。)

と。ブッシュ夫人という女性が聞一多をハリエット・モンロウに紹介してくれると決った時の、彼の喜びが伝わってくるようではないか。書信三三「致父母親」(十月九日前後)では、

伊已與男兩封介紹信，一致美國最有名詩人山得北，又一致《詩》(美國有名雜誌)總編輯并著名批評家孟祿女士。

此後可以此邦第一流文人游，此極可貴之機會。

(彼女は私に紹介状二通を書いてくれました。一通はアメリカで最も有名なサンドバーグ氏で、もう一通は「ポエトリー」(アメリカで有名な雑誌)の編集長にして、有名な評論家モンロウ女史へのものです。今後、この国の一流の文人とお付き合いすることができそうです。全く得難い機会です)

と書くが、実際は、聞一多がハリエット・モンロウに会えたかどうかは、定かでなく、一九二二年十二月に会ったのは、ユーニス・テイエットジェンズ (Eunice Tiejens) ということになる。一方、エミー・ロウエルに関して、彼女の死の報を中国で聞いた聞一多は、一九二五年七月一日の「京報副刊」に「美國著名女詩人羅艾爾逝世」と題する追悼文を発表している。なお、色彩の師として崇めた、フレッチャーや、その他の詩人については、本日は省略させて戴く。

三

さて、サンドバーグについて、聞一多は次のように書く。

The author I last quoted, Mr. Sandburg, is the most radical both in the thought and in craftsmanship of present-day American poets. . . .

(二番目に引用したカール・サンドバーグ氏は、今日のアメリカ詩人の中で、思想、創作態度とも最もラディカ

ルな人物である)

と。以下、サンドバーグが工業国家アメリカの桂冠詩人たる資質を備えたのは、シカゴという工業都市に住み、シカゴで働き、現在もそこに住んでいることが原因であるとす。そうした発想の原点に、郭沫若がいる。聞一多は、書信二四「致吳景超、顧毓琇、翟毅夫、梁実秋」の中で、

『女神』多半是在日本作的。作者所描寫的日本并不真確。他描寫了雄闊的東島，但東島并不雄闊。東島是秀麗的，應該用實秋底筆來描寫。

『女神』は大部分が日本で作られたものである。作者が描いた日本は、正確でない。彼が描いたのは、力強い本州であるが、本州は決して力強くはない。実秋のタッチで描くべきだ)

と述べるように、郭沫若描くところの(工業的)日本が正確でないとする。この頃、聞一多は、詩を論ずる時、よく郭沫若を引き合いに出す。何故ならば、郭沫若は当時、中国の新詩の第一人者であって、聞一多も彼を尊敬はするが、一面、ライバルとも見ていたようである。それが後の『女神』的時代精神、『女神』的地方精神に通じていく。前者が尊敬を意味しているとすれば、後者は、辛口の批評であった。

実は、この部分で、日本に留学したいという希望を口にするのである。また、書信二七の「致吳景超，顧毓琇，梁実秋」でも、

芝加哥乃美國第二大城。我只講一件事，你們就知道這里工場之多。米西根街一帶房屋皆著黑色，工場吐出之煤煙薰之使然也。我們在那里去一回，領子就變黑了。

（シカゴは、アメリカ第二の都市である。一つの事を話せば、ここに工場が如何に多いかが分つてもらえるだろう。ミシガン街一帯で、建物がみな黒ずんでいるのは、工場の吐き出す煙のしからしむるところだ。一回でもそこに行けば、カラーが黒くなってしまうよ。）

と書き、今日で言えば、公害であるが、その酷さを訴えているのである。聞一多は、詩「孤雁」〔『紅燭』「孤雁篇」〕の中で、

啊！ 那里是蒼鷹底領土——（ああ！そこはオオタカの領土だ）

那鷲悍的霸王啊！（かの精悍な霸王よ！）

他的銳利的指爪，（その銳利な爪は、）

已撕破了自然底面目，（自然の眞の姿を引き裂いて、）

建築起財力底窩巢。（財力の巢を築いた。）

喝醉了弱者底血，（弱き者の血に酔って、）

吐出些罪惡底黑煙，（罪惡の黒煙を吐き出すのだ。）

塗污我太空，閉熄了日月，（我が大空を汚し、日月の光を消し、）

教你飛來不知方向，（お前に、飛んできても方向が分らなくさせ、）

息去又沒地臟身啊！（一休みしようと思つても、身を置くところもないのだ。）

と詠む。「蒼鷹」は、アメリカの象徴のオオタカであり、それが鋭利な爪で自然を破壊するというわけである。また、詩「寄懷美秋」（『紅燭』所収）第二連では、

在黑暗底巖城里，（暗黒の厳しい町では、）

恐怖方施行他的高壓政策，（恐怖がまさにそいつの高圧政策を行おうとしている。）

詩人底尸肉那里蒼黃著，（そこには詩人の死肉が黄灰色に変わっていて、）

彷彿一只喪家之犬呢。（まるで喪家の狗のようだ。）

とあり、過度に都会化、工業化したアメリカに対して、不快感を感じるのである。

最後に、聞一多の郭沫若に対する見方を眺めておきたい。

I deeply remorse that I myself am scarce free from this guilt . But cethanly no one is more guilty than Kuo Mo Jo in this respect . At best he has dexterously embodied western thoughts in Chinese word : may be a good imitator of Goethe . Until this moment I suppose I have given him too much praise then he really deserve .

（私は、自分自身がこの罪から僅かに自由であることに深い自責の念を持っている。しかし、この尊嚴という意

味では、郭沫若より罪深い人間はいない。彼は、せいぜい巧みに西方の思想を中国語で表したに過ぎない。恐らく、ゲーテのよい模倣者なのであろう。今日この時まで、私は、彼のあるがまま以上に、買ひ被っていたのだと述べている。

おわりに

我々は、この英文の手紙を通じて、当時の彼の文学観、世界観の一端を見たであろう。さる英文学者にこの手紙を見せたところ、「英文自体はそれほど流暢ではないが、意味は取ることができであろう」ということであった。逆に、私のような英語の門外漢にとっては、中国語訛りのある英語に悪戦苦闘したことは事実である。単語も書き言葉としてのものが多用され、必要以上に難しく書いたという感想を持った。ただ、背景が比較的よく分っていたため、何とか読み通すことができたと言えなくもない。

聞一多は、八年間で卒業するのが普通であった清華学校を十年かかって卒業した。卒業時の一年は、ストライキ事件であったが、最初の一年は、英語の成績が悪くて留年したと言う。そうした聞一多がこのように英文の手紙を物すようになつたのは、清華学校が持つ特殊性と無縁ではないであろう。要するに、八年の課程を修了すると、アメリカの大学の二年次に編入できるようになっていたためである。聞一多は、卒業時になると、かなりの英語の原書を読んでいた。清華文学社の報告で、英文のレジュメを書いているし、アーサー・ウェーラー、I. V. リチャーズ等の評論を読んでもいたのである。

【付録】

親愛なる友人たちへ

タイプライターを練習する機会に恵まれたので、英語で書いてみようと思う。中国語で書くと、ホームシックに罹ってしまうだろうから。

シカゴ到着以来、引越しやら見物やら諸事に忙殺されて、諸兄に便りをする暇もなかった。ほとんど三週間になる。この間、書きたい書きたいと思っていたのによ。僕はずっと雑誌を読んだり、最新刊の本を探したり、あらゆる機会を捉えて、人々の語ることから学んだ。というのも、この国の文学界における最新の動向とか、注目すべき傾向を知っておきたかったからだ。その結果を今、概括しようと思う。しかし、それが全くの決定済みものだからとか、保障付きのものだから信用が置けるとは考えないで欲しい。

文学における所謂「新文学運動」が我々にとって、全くの地方的、偶然的なものでないことが分かっただけでも素晴らしいことだ。むしろ、知つてのとおり、世界的規模の出来事であるからこそ、英語圏の人々の間にも流行しているのだ。

我々は、太平洋対岸の隣人から政治的再生のアイデアを模倣したように、文学再生のアイデアを模倣したのだ。アメリカ文学史にとって、実にエポックメイキングな時期だ。輝かしくも喉爽やかな時代の寵児でもあり、今日における偉大な歌い手でもある。ペールに覆われたミステリーが終幕し、詩作が火蓋を切つて落とした。ある作家（詩

人)は、「今日、あらゆる階層の男と女、あらゆる性格の男と女が詩を読み、それについて語る。彼らは自分自身のことを詠む。詩人たちは、自分の詩について語り、自作を読む」と公衆に言った。出版業者は、「新」詩人を歓迎している。これは、実際、今日におけるパーティーへの招待状であろうか。「新」詩派の主たるメンバーは、ロバート・フロスト、バーチェル・リンゼー、エミー・ロウエル、エドガー・リー・マスターズ、カール・サンドバーグ、サラ・ティースデイル、ハリエット・モンロウといった人たちで、それ以下の人々は山ほどいる。

我らの文学の叛徒、胡適博士の「八不主義」が全部が全部、彼の独創をではないことを知ることは興味深いことである。偉大なる、現存する偉大な女流詩人、ミス・エミー・ロウエルがリーダーを務める「新」詩派、イマジストのクリードを教条、書き抜いておこう。

1. 普通の口語を使うこと
 2. 新しい心情の表現として、新しいリズムを創り出すこと
 3. 主題の選択という点では、完全な自由に従うこと
 5. 硬質で明確さを持ち、曖昧で不明確さを持たずに詩を作ること
- 何となく胡適博士の(八不主義の)条文の匂いがしないだろうか。

さて、君たちにイマジストを紹介したい。というのも、彼らの後を追いかけることにより、我らの「新詩」が単なる一時的な熱狂状態から抜け出すための段階を示していくだろうと思うからだ。我々は、少なくとも、ミス・ロウレルと彼らの盟友たちこそ、こうした六か条の、偉大にして陳腐な条文四か条はすでに引いてある熱心な擁護者に違いない。残りの二か条は、以下の通り。

4. イメージを提供すること、……

5. 要するに、我々の大多数は、集中力こそが詩歌の精華であることと確信する。

我々の「白話詩」は、余にも実態がなさ過ぎるし、薄っぺら過ぎるし、瘦せこけている。強度の集中力を持って構築されたイマジストの詩の持つ個性的な深く温かみのある色彩によつて修正を加える必要がある。ロウレル女史の「風と銀」を書き写し、僕の観点を説明したい。

(詩「風と銀」省略)

また、サンドバーグ氏の「霧」を取り上げる。

(詩「霧」省略)

この二作と我々の雑誌の韻文作品とを比べてみたまえ。

二番目に引用した詩人、カール・サンドバーグ氏は、今日のアメリカ人詩人の中で、思想、創作態度とも最もラディカルである。彼は、理髪店の掃除人、安劇場の裏方、レンガ工場の運転手、ホテルの皿洗い、小麦畑の刈り手、等々の経歴を持つ。こうした仕事は、彼に工業国家アメリカの桂冠詩人たる教育を施したのであった。彼は今もシカゴに住んでいる。その公刊された詩集は、「シカゴ詩集」と名付けられている。この街に住む人々は、彼を英雄とも代弁者とも言つて、否、自分たちの神とも賞賛するのである。多分、君たちは、私がこの偉大な詩人がしばらく前、シカゴ大学で行った後援会に出席したと言つたら、知りたがるだろうね。私が偉大なる人物を前にして、いかに鼓舞激励されたか想像できるだろう。

今、君たちに便りを認めている。これからも、アメリカで最も有名な女流詩人の一人、ハリエット・モンロウが編集している雑誌、「詩の雑誌」の写しもどんどん送るつもりだよ。この雑誌の名声については、ニューヨーク・サン

デイ・トリビューンを引くに止めよう。「英語圏詩人の最高の地位にランクされている」と。よく知られた批評家がこう指摘している。「恐らく、モンロウ女史はアメリカにおける他のいかなる人物よりも詩歌に大きく貢献した」、「この雑誌の誕生は、アメリカ詩界のルネッサンスの誕生でもある」と。「新青年」が我々のために果たしたのと同様、いや、それ以上の貢献をアメリカの新文学運動のために行つたのだ。モンロウのことをこれ以上紹介するよりも、その作品を見てもらう方がいいだろう。

(詩「愛の歌」・「山の歌」省略)

ところで、批評家としてのモンロウの名声は、詩人としてのそれより大きい。

付け加えて忘れてはならないアメリカの詩人として、神童の誉れ高いヒルダ・コンクリング女史がいる。彼女は二十歳になるかならないかの時、ありのままの才能、驚くべき繊細さ、成熟した芸術家の精密さを示したのだった。

(詩「水」・「デイジー」省略)

ある事柄が私を誠実さ、すなわち、我々の詩的世界における環境の健全性について問い掛けさせる。「新詩人」たちによって引き起こされた最も著しい論争主張は、彼らの芸術に齎された変化というのは、以下のようなものである。詩とは、西部開拓および工業再建から、言語の中に響きあう生命生活のようなものである。アメリカ人の生活は、窒息するような押入れの中から戸外のジプシー風の自由へと転換している。だからこそ、詩というものは、諸々の必要性が生み出す簡潔にして直截な、詩的にして力強いものであつて、そのまま、自然のままの荒削りの方法さえも生み出している。かくしてこれを「新」詩と呼ぶのである。しかし、我々の中国はどうであろうか。詩における過度の工業化問題があることは事実である。しかし、何が受け入れ難い国家的規模にも比せられる断片であろうか。だが、我々の詩人は、煤煙と鉄錆の臭いというような野卑なことを掲げてきた。また一方、アメリカ人は若

い人々である。彼らは、自然に無邪気な子どものように、率直さと簡潔性と粗野さをもって語りたいたのだ。しかし、洗練された年輩の紳士に対して謝辞を言ったり、語学教師が自分の三歳児の語り口で冗談を言うことが許されると言うのであるか。彼にとつて、子どもの考え方で考えるところに、どんな理由があるのだろうか。私は、明快さ、直截さ、厳格さをもった言語語を使うことに反対しない。しかし、私は、子どもの真似をすることはできない。偉大なアメリカ詩人は、彼等の国家的傑作として、彼等の同国人によつて、歓迎を受けている。彼らは、自分たちの国家的な芸術家として、盛り返しを図っているのだ。我々は、何をやっているのか。我々は、新芸術がより簡明な、より今日的な、当世風な芸術たらんとして叫んでいるのだ。何とせばしば、個人としての芸術家が個性を求めて非難されていることか。批評家たちによつては、個性が芸術であることに文句をつけるものさえる。眞の芸術であれば、国家的な芸術といえども、このルールも例外ではない。そのとおり、我々は、「文言」の老奴隷をその代わりとしての「白話」に取つて代わらせることができた。しかし、その変化は、我々が我々自身の生き生きしたもの、人民としての個性を失つた時に、結局、付けを払うのか。我々の作品を通して見てもらいたい。外国語の術語、外国語の表現、外国語の仄めかし、外国語の主題、外国の思想による混乱を見てもらいたい。私は、自分自身がこの罪から僅かに自由であることに深い自責の念を持っている。しかし、この顧慮尊厳に関して、郭沫若より罪深い人間はいない。彼は、せいぜい巧みに西方の思想を中国語に具現したに過ぎない。恐らく、ゲーテの模倣者であるかも知れない。この時まで、私は、彼のあるがまま以上に、買いかぶっていた。

私は、あとあとの便りのために、ここらで筆を置くことにしよう。表現をしなくてはならない日常の読書から多くの印象を受けている。君たちに手紙を書くことが唯一の表現法であるようだ。と言うのも、知つての通り、ともに詩を語る人間は誰もいないのだから。たまには詩的過ぎることも起きたかのように嘲つてみたいんだ。そういうわけ

で、もし、誰かがちよくちよく手紙を寄越してくれたら、本当にありがたいんだよ。

新学期の初めに当って、私は、我が文学会が生き生きとした気持を持って、始まるように、一年を通じて、成功裏に事が運ぶようにと祈っている。みんなが今年に大きな事をやり遂げ、文学会に誇りを持てるよう祈っている。今年に向けての我々の新しい計画が是非とも知りたい。特に銘銘の近作が是非とも読みたい。では、さようなら！

敬具

T
|
W
e
n